



この度、令和6年能登半島地震におきまして甚大な被害が発生し、多くの尊い命が失われました。謹んでお悔やみを申し上げますとともに、避難生活を余儀なくされておられる皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

新年の幕開けに発生した大地震、そして海上保安庁と日航機の事故に衝撃を受けました。様々な報道に胸が締めつけられるような思いがします。そして、改めていろいろなことを考えさせられました。本校ではおもに1年生で防災をテーマにした学習に取り組み、年に数回行う避難訓練でも「予告なし」の訓練を実施する等、防災意識を高める取組を進めています。が、心のどこかで「自分は大丈夫」という心理が働いていないか？これは不安から自分を守るために、誰もが有る程度持っている心理だそうですが、非常時にはすぐさまそのスイッチを切るよう「心の準備」が必要であると痛感しました。

先日行われた1年生の防災学習発表会では「できることをひとつでも実践すること」の大切さをみんなで確認し合い、防災もお互いに力を合わせることが重要だということ学びました。日頃の積み重ねや、人と人との繋がりがいざという時に力となるということです。日常生活と非常事態は紙一重とも言えます。今回の震災を通して、学校生活において日々仲間を大切に、思いやりの心や助け合いの精神を育むことがいかに大切かということを考える機会にしてほしいと願っています。

被災地の復興をお祈りするとともに、私たちにできることを考えて取り組んでいきたいと思います。また「今」を大切にして、3学期の学校生活をしっかり頑張っていきたいと考えています。保護者の皆様、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

校長 谷口 恭子

1年生防災学習発表会



取り組んだ
プロジェクト

★オリジナル「防災ドラマ」制作 ★やってみた“トライアル”
★蒲生野中学校安全チェック ★お勧めの非常食を考える
★光ファイバーを使った斜面（雨量）観測 ★防災グッズを考える

1月16日、1年生がこれまで取り組んできた6つの防災プロジェクトについて発表しました。実際に体験してみたり、調査や実験を行ったり、いずれも自分たちが体得した学びで、説得力がありました。関西大学の近藤教授、小山教授、そして学生のみなさんとともに、楽しみながら役に立つ学習ができました。学校の安全チェックで発見してくれた危険箇所は早速、改善していきます。

新*生徒会本部 ～能登半島地震の募金活動～

「何かできることはないか」と考え、募金活動に取り組みました。須知高校と町内3中学校生徒会で協力して、校内外で実施しました。

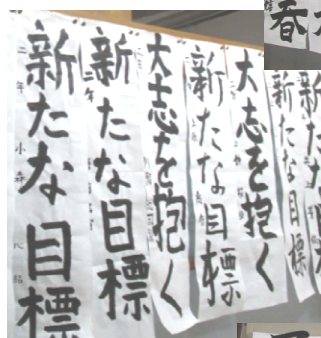


町内の各小学校児童会も活動しています。京丹波町の思いを被災地の皆さんに届けたいです。

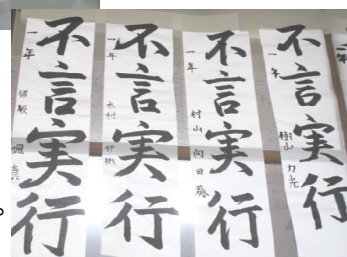
マーケスで活動した日は1月17日。この日は29年前の阪神淡路大震災の日でもありました。神戸の街に灯された灯籠で描かれた文字は『ともに』。「震災の記憶を伝えていきたい」という思いと能登半島地震の被災者に寄り添う思いが込められたものだそうです。

新年の書き初め

【3年生】旅立ちの春も近いですね。残り少ない中学校生活を大切にしてくださいね。



【2年生】次は君たちの出番ですね。目標に向かって頑張りましょう！



【1年生】持ち前のチャレンジ精神を大いに発揮して下さいね。

第18回「北方領土と私たち」作文コンクール

北方領土問題を考える作文コンクールで本校から3名の生徒が入賞しました。このコンクールは、北方四島（歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島）の現実を知り、その歴史的な経過を正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的として実施されるものです。1月17日に京都府庁で表彰式が行われました。

【京都府知事賞】 2年：長谷川 さん
【佳作】 2年：中川 さん
【入選】 2年：村瀬 さん



「これからも社会問題に関心を持ってください」と知事から激励の言葉をいただきました。



昨年8月に「北方領土青少年現地視察研修」で訪問した根室から見た風景

うっすらと見える国後島(くなしりとう)

「故郷に帰りたい」そんな思いの人はこの世に何人いるだろうか。

そんな思いを強く持っているのが、北方領土の元島民である。その故郷を奪われた元島民は年々減ってきている。しかし元島民の人たちが「島に帰りたい」と望む気持ちはずっと消えることはない。

北方領土は旧ソ連軍が北方四島に不法侵入して島民を追い出し、法的根拠なく占拠している日本の領土である。現在も、元島民は島に帰れないという現状にある。

私は昨年実際に納沙布岬を訪れ、納沙布岬から一番近い歯舞群島の貝殻島をこの目で見た。目と鼻の先にある故郷に、帰りたくても帰れない悲しみや辛さと、今まで感じたことのない複雑な感情を味わった。もし自分が元島民で、目の前に見える故郷に長い間ずっと帰れなかったらと思うと胸が苦しかった。

北方領土について知ってから「パレスチナ問題」にも関心が湧いた。パレスチナ問題も北方領土問題のように多くの人が故郷に帰れずにいるという。パレスチナ人は故郷と家を失い、約七十年に渡り難民として故郷への帰還を切望しながら生活している。

この二つの問題は同じ状況に置かれていると思う。どちらの問題も今までいた場所からいきなり追い出されて故郷や家を失い、帰りたくても帰れず、故郷へ帰りたいと望む人が多くいるという共通点があると気づいた。私は北方領土問題とパレスチナ問題を重ねて、パレスチナ問題について調べてみると北方領土問題との共通点がいくつかあった。共通点が見つかるのはそのことについて知っているからで、知らなければ考えることすらできない。

今回は二つの問題で考えたが様々な問題でも同じことが言えると思う。それぞれの国が話し合い、互いの考えを知ることによって共通点を見つけ、解決に向かえる。しかしそれは国の指導者に任されていることで私たち一般の人には応援しかできない。だが、自分たちの国と相手の国について知って考えることは誰にでもできる。少しでも「知る」ことによって自身への変化は起きる。

私は、現地の根室に行って北方領土問題の現実の姿を知った。現地に行くまでは学校やニュースで「北方領土」という言葉を聞いても耳を通るだけだったが、研修に行ってから「北方領土」という言葉を聞くだけで無意識に反応する。知ることによって興味が湧き、自然に北方領土への意識が高まった。私が北方領土問題を知ったきっかけは、学校での北方領土問題の講演会。講演会があったからもっと知りたいと思った。

何かに興味をもち、知るにはきっかけが必要で、多くの人に北方領土問題を知ってもらうには自らが進んで調べて知るきっかけを作らないといけない。そのきっかけの一つはこの作文を書くことだ。作文を書くことで北方領土問題を知り、考えることもでき、多くの人が北方領土問題に向き合える。私は作文を書くのは二回目で前回との考え方に変化があった。同じことでも何度も考えるごとに考えが深まり新たな見え方が生まれる。北方領土問題を多くの人が知り、自分たちのこととして考え、北方領土問題を記憶から消さないでほしい。だから私はこれからもずっと北方領土問題について考えていきたい。

